

遠隔実施による新任教員研修の成果と課題

—愛媛大学授業デザインワークショップにおける実践をもとに—

竹中 喜一, 仲道 雅輝, 村田 晋也, 中井 俊樹, 小林 直人

愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室

Evaluation of a Web-based Workshop Introducing the Course and Class Design for New Faculty Members in Ehime University

Yoshikazu TAKENAKA, Masaki NAKAMICHI, Shinya MURATA, Toshiki NAKAI and Naoto KOBAYASHI

Office for Educational Planning and Research, Institute for Education and Student Support, Ehime University

1. 背景と目的

愛媛大学では、テニユア教員育成制度とよばれる教育者・研究者としての自立を支援する制度がある¹⁾。本制度が適用される教員は、5年任期で採用される助教や講師であり、3年間で100時間の研修を受講する(仲道・小林, 2020)。その研修の必修科目の一つとして、愛媛大学授業デザインワークショップ(以下、WS)がある。本WSは従来、2日間の対面による研修として実施していたが、2020年度は新型コロナウイルスの影響から対面で実施することができなくなった。しかし、本WSはテニユア教員育成制度の必修科目であることから、実施を見合わせることは同制度の適用を受ける教員に大きな影響を与える。したがって従来から実施しているWSの代替策として、遠隔によるものを急遽設計し、実施する必要があった。

本稿では、WSの再設計の内容を示し、再設計に基づき実施した成果と課題について明らかにすることを目的とする。学校教育では対面授業の代替策としてICTを活用した緊急遠隔授業(Emergency Remote Teaching: ERT)が実践されている。ERTとは、危機的状況により、教育の提供を通常と異なる代替的な方法に一時的にシフトする活動を指す(Hodges et al., 2020)。ERTの実施における最優先の目的は、迅速に準備し確実に教育機会を提供できることであると、Hodgesらは主張している。テニユア教員育成制度の必修科目という位置づけである本WSにおいても、この最優先の目的は果たされるべきものである。

なお、今回の再設計にあたっては、オープン教材(Open

Educational Resources: OER)の活用に着目した。OERとは「何らかの専門性をもった個人や組織が、教育のためにインターネットに公開する教材」である(重田, 2016)。大学教員向けのFDに用いられているOERには、たとえば東北大学が公開するPDPOneがある。PDPOneは、半年で6千件以上閲覧されており、個人あるいは組織の能力開発に幅広く活用されている(今野ら, 2017)。しかし、OERを活用した研修設計については実態が明らかになっていないわけではない。そこで、本WSをOERの活用による遠隔型FD(Faculty Development)として再設計し、その成果と課題について考察することにより、今後の遠隔型FDの実施に関する示唆を得たいと考えた。

2. 従来(2019年まで)のWS

2.1 プログラムの概要

本WSは愛媛大学主催で毎年1~2回行われるものである。実施目的は、授業の構想・設計・実施・評価に関わる一連の過程に関する学習を通じて、授業に必要な基礎知識と技術を習得することである。2019年度までに33回行われ、毎回概ね10~20名程度の参加者で推移してきた。多少の変更はあったものの、表1のような目標や内容で実施されてきた。

本WSは、授業における一連の過程を講義とグループによる演習によって構成される。講義の内容は、コース全体および1回の授業設計の方法、シラバスの書き方、学習評価、アクティブラーニングといったものである。講義に加

えて、仮想の共通教育科目のシラバスと1回分の授業計画を研修期間中にグループで作成する演習の機会を設けた。演習の最後には、作成した科目の内容に関する10分間の模擬授業を行っていた。なお、研修期間は2日間であり、研修は宿泊を伴う「合宿形式」または、宿泊を伴わない「通い形式」で行われていた。参加者の研修期間中における想定学習時間は、18時間であった。

表1 本WSのプログラム(2019年度)

<p>目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 学生の学習を促すシラバスを書くことができる。 2. さまざまな授業方法の特徴を理解し、学習目標に適した授業方法を選択できる。 3. 教育評価の原理と種類を理解し、学習目標に適した評価方法を選択できる。 4. アクティブラーニングを取り入れた90分の授業の計画を作成できる。 5. 作成した授業計画案にもとづいて模擬授業を実践できる。
<p>プログラム：</p> <p>1日目</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. アイスブレイキング 3. ミニ講義Ⅰ「コース設計&クラス設計」 <ul style="list-style-type: none"> ・1科目および1回の授業計画 ・90分授業の基本構成 4. ミニ講義Ⅱ「シラバスの書き方&学習評価の基本」 <ul style="list-style-type: none"> ・目標設定 ・成績評価の目的 ・評価の方法と評価対象 5. グループワークⅠ「共通教育科目の開発Ⅰ」 <ul style="list-style-type: none"> ・模擬授業を行う科目に関するシラバスをグループで作成(科目の内容は主催者側が指定) 6. 中間発表 <ul style="list-style-type: none"> ・グループワークの進捗状況の発表 7. ミニ講義Ⅲ「学習者の学びを促進する様々な授業方法」 <ul style="list-style-type: none"> ・講義法 ・双方向型授業 ・体験型授業 ・参加型授業 <p>2日目</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 振り返り・質疑応答 2. グループワークⅡ「共通教育科目の開発Ⅱ」 <ul style="list-style-type: none"> ・グループワークⅠのつづき 3. グループワークⅢ「共通教育科目の開発Ⅲ」 <ul style="list-style-type: none"> ・模擬授業の練習 4. 模擬授業 <ul style="list-style-type: none"> ・模擬授業+討議 5. 閉会式 <ul style="list-style-type: none"> ・振り返り ・大学教員としての今後の質向上 ・修了証書授与 ・閉会の言葉

2.2 参加者からの評価

本WSの評価は、事後アンケートにより行われていた。事後アンケートの主な設問は、本WSの参加動機、内容および運営面の満足度、授業に活用できそうな点といったものである(表2)。

全体の満足度は例年高く、2回実施した2019年はそれぞれ100%(n=12)、90%(n=10)であった。本WSの意見や感想には「シラバスの書き方や様々な授業方法など多くを学ばせていただいたが、とりわけ、グループワークの面白さを体感させてもらった」といった肯定的評価が多かったが、「スケジュールがややタイトであり、講義内容をもう少し絞り込んでもよいと感じた」といった、改善す

べき点に言及されていた意見もあった。

表2 本WSの事後アンケート(2019年度)

<ol style="list-style-type: none"> (1) WSへの参加動機 (2) WSの目的や内容について、ある程度知った上で参加したか (3) WSの目的は明確に設定されていたか (4) WSは自分の業務(教育実践)に生かせる内容であったか (5) WSはわかりやすい順序ですすめられていたか (6) WSでよかった点 (7) WSで設定した目標のうち、達成されたもの (8) WSで学んだ点、それに影響された教育実践の場でやってみたい点 (9) 講師の言動は学習意欲を高めたか (10) 事務局は手際よくWSを運営していたか (11) WS会場は快適な環境であったか (12) WSは全体を通して満足できるものであったか (13) WSの改善点など意見や感想

3. 今回(2020年)のWS

3.1 再設計の方向性

今回は、従来の本WSの内容や評価を踏まえ、基本的には従来の方針を踏襲し、対面型相当の教育効果を図るWSを設計することとした。具体的には、実施の目的、講義で取り扱う内容、学習時間、参加者が提出する課題、講師や他の参加者との双方向性の担保といったものを対面型相当にすることを意図して、本WSを再設計した。

ただし、対面から遠隔への形態変更に伴い、模擬授業の実施を割愛することとした。前回までの実施では、実施時点で授業担当のない参加者もいた。そのような参加者が模擬授業を行う場合、新たに録画機材の準備や撮影などにより大きな負担をかけることとなる。また、参加者数や撮影の画質によっては、学内のストレージの容量を圧迫する危険もあった。したがって、「迅速に準備ができ、確実に教育機会を提供できる」というERTの趣旨に則り、目標を授業設計関連に絞ることとした。具体的には、表1で示した5つの目標のうち「作成した授業計画案にもとづいて模擬授業を実践できる」を割愛した。

3.1.1 学習のプラットフォーム

遠隔で本WSを実施するにあたって、学習のプラットフォームが必要であった。愛媛大学ではLearning Management System(LMS)としてMoodle3.5(以下、Moodle)を運用している。このLMSは授業に限らず教職員対象の研修でも活用実績があったため、本WSでも活用することとした。

学習に必要な教材や課題はすべてMoodle上に提示され、WS修了に必要な学習はMoodle内で完結するようにした。ただし、オリエンテーションでは参加者の質問にすぐに回答する必要がある。そのため、オリエンテーション

を Zoom による同時双方向型（同期型）で実施した。

3.1.2 教材の選定

教材の選定にあたっては、本 WS 実施までの準備による時間的制約等の面を考慮した。新たな教材を開発するのではなく、一般に公開されている OER や市販されている書籍の中から選定することとした。

教材の選定にあたっては、従来の内容と共通部分が多いことと、参加者の学習にかかる負担が従来に比べて過度なものにならないことを考慮した。その結果、関西地区 FD 連絡協議会が制作した OER の動画教材「シリーズ 大学の授業を極める」（以下、動画教材）を活用可能と判断した。この動画教材は、「授業設計」「講義法」「アクティブラーニング」の3種類あり、本 WS の従来の内容とほぼ共通しているためである。また、動画教材はすべて YouTube で公開されているため、参加者が自学自習可能であり、追加の費用や手続を要しない。さらに、3種類の動画教材はいずれも約 10 分程度×4本で構成されており、視聴時間も従来の講義時間と大きくは変わらない。

ただし、本動画教材には「学習評価」をテーマとする内容が含まれていなかったため、当該テーマについては、中島編（2018）の書籍の一部を閲覧する課題を提示することとした。以上の教材により、従来と同様の内容を網羅した。

3.1.3 学習の理解度確認

3.1.2 で閲覧した動画教材や書籍の内容について、理解度を確認するために小テストを作成した。小テストは、「授業設計」「講義法」「アクティブラーニング」「学習評価」の各単元で5問ずつ、計20問で構成される。いずれも多肢選択式で、動画教材や書籍の内容に関連する設問である。小テストは Moodle 上にアップロードされ、参加者の回答は自動採点される。各単元 80%以上の正解率であれば合格となり、不合格となった参加者は合格するまで再受験しなければならない。すべての単元において合格することが、本 WS の修了要件の一つとなる。

3.1.4 双方向性の担保

学習期間中の双方向性の担保を図るために、参加者同士あるいは参加者と講師の間で、意見交換や質問ができるようにした。意見交換や質問については、参加者と講師が同時に Zoom にアクセスし、双方向のやり取りが行える同期型の機会と、参加者や講師が任意のタイミングでやり取りを行う非同期型の機会の双方を設けた。

まず、同期型の機会として、研修開始日のオリエンテーションと、学習期間の半ばに「授業に関するお悩み相談会」を実施した。これらの内容の詳細については、後述する。

次に、非同期型の機会として、Moodle の「フォーラム」とよばれる電子掲示板機能を用いて、参加者からの質問を

受け付けられるようにした。フォーラムを用いると、質問に対する回答がスレッドで表示され、質問と回答は参加者全体に公開される。そのため、同じような質問をしようとした参加者にとって役立つものとなる（図 1）。

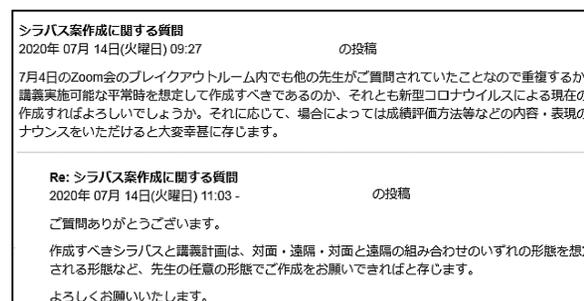


図 1 Moodle のフォーラム機能を用いた質問と回答

また、参加者に対しては、自身が担当する授業のシラバスと1回分の授業計画（90分の授業の進行に関する計画）を提出する課題を求めた。作成したシラバスおよび授業計画の課題の提出には、質問の受付と同様に、フォーラム機能を用いることとした。フォーラム機能によって、参加者が提出した課題は全体に公開される。そのため、参加者同士のピア・レビューや講師からのフィードバックを行うことができる。

ピア・レビューやフィードバックの結果をもとに、参加者は、自身のシラバスや1回分の授業計画を修正し、参加者が行う授業の改善につなげることを意図して、このような双方向のやり取りを設けることとした。なお、ピア・レビューやフィードバックを踏まえて修正したシラバスと授業計画を提出することが、本 WS の最終課題となる。

3.2 プログラム概要

3.1 の内容を踏まえて設計されたプログラムを表 3 に示す。学習期間は 2020 年 7 月 4 日～24 日の 3 週間とした。対面型では 2 日間の学習期間であったが、ピア・レビューやそれを踏まえた課題のブラッシュアップに十分な時間をとるようにしたためである。今回の参加者は 23 名であった。

まず、学習期間の初日である 7 月 4 日に、同期型で 60 分程度のオリエンテーションの機会を設けた。オリエンテーションでは、Moodle 上にある教材や学習課題の紹介、課題の進め方、講師紹介や参加者間の自己紹介などを行った。

オリエンテーション以降、参加者は①「講義法」「アクティブラーニング」「授業設計」の動画教材閲覧、②「学習評価」の書籍教材閲覧、③①②の内容に関する小テストへの回答、④シラバスと1回分の授業計画の作成、⑤他の参加者が作成したシラバスと1回分の授業計画に対するコメント、⑥⑤を踏まえたシラバスと1回分の授業計画の修正、といっ

こうした結果が得られたのは、遠隔授業のメリットを参加者が感じていたためであると考えられる。表4 (15) の「WSの改善点など意見や感想」についての自由記述(以下、自由記述)²⁾には、「オンラインでいつでも意見を交換できる点は非常に良かった」「自分のペースで作業が進められた」「他の方々同士の意見のやりとりも Moodle 上で可視化されていたため、(対面ではなかなか難しい) 全てのやりとりを閲覧することができた」といった回答があった。今回の WS の学習期間は約3週間であったが、このように対面実施と比べて学習期間を長めに設定したことにより、遠隔実施によるメリットを生かすことができたと考えられる。

4.2 学習成果

参加者の学習成果に関する設問としてまず、表4 (4) の「WSは自分の業務(教育実践)に生かせる内容であったか」といったものが挙げられる。この設問は「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4件法で構成されていたが、参加者の肯定的評価は100% (「そう思う」95% (19名) + 「どちらかといえばそう思う」5% (1名)) であった。

参加者の学習成果については、表4 (8) の「WSで学んだ点、それに影響されて教育実践の場でやってみたい点」という設問からも把握することができる。この設問は記述による回答を求めた。結果は、表5のとおりであった。特に、シラバスや90分の授業計画関連、そして、アクティブラーニング関連の回答が多くみられた。また、表4 (15) の自由記述の回答にも「様々な授業テクニックを学ぶことができました」「自分の授業の組み立てを客観的に見るよい機会」といったものがあり、参加者が学習成果を得られたと感じていることがうかがえた。

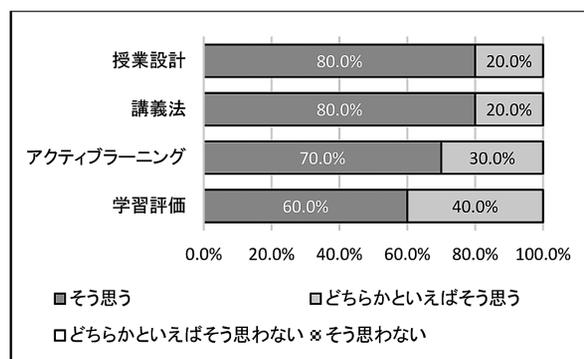
表5 WSで学んだ点や実践したい点

1. シラバス・90分の授業計画関連
<ul style="list-style-type: none"> 様々な分野の先生方との交流とシラバス、授業計画を拝見し、講義の運営や改善点について学ぶことができました 集中力が持つ時間は非常に短いということを知ったので、適度な小休止を挟みたいと思いました。授業自体受け持ったことがないのですが、他の先生方を見ても授業計画をこれほどしっかり作ってから挑んでいるのだと知ることができたので、自分もそのように取り組みたいと思いました 授業最後の振り返り It taught me the way of keeping student, attentive to my class 各回の講義は導入から始めて締めくくりまでの流れを分単位で計画して臨むことが大切ということを知りました。一方的にひたすら説明して終わりというのではなく、適宜双方向の要素も取り入れ、学生が主体的に講義を聞くようにする環境を整えられるよう努力したいと思います シラバス作成において、到達目標などの具体性など学生視点での見方を学んだ 実際の授業設計の参考にしたい 共通教育科目と専門科目との異同を理解した上でのシラバス・講義計画の作成と実践

- 15回の授業で学んでほしいことを、「基礎」というあいまいな言葉でなく具体的に示すことが必要であると学んだのが最も大きかったです。今後実践の場では、教科書のどこまで進むかよりも「各回で何ができるようにしているか」に気を付けたいと思います
 - 遠隔授業の設計 プレイクタイムの取り入れ方等
2. アクティブラーニング関連
- 積極的なアクティブラーニングの導入
 - アクティブラーニングをどのように授業に組み込むかについて理解が深まりました。単に導入するのではなく、学生が本当の意味で主体となって活動ができるような動機づけの促しや実施のタイミングを学んだので、今後、取り入れていきたいと思っています
 - グループワークなどのアクティブラーニングを組み込んでみたいと思いました
 - アクティブラーニングを取り入れた講義を実践してみたいと思った
 - これまでは知識提供型授業だけでも十分だと考えていたが、積極的にアクティブラーニングを取り入れた授業設計を考えていきたいと思っています
 - アクティブラーニングの方法について考える機会となった
 - 学生を2人ずつのペアにし意見交換後に全員に発表させるという手法は実際に試してみました。各自が考えを整理する良い機会になったと思われす
 - 授業中のグループワークに学生が積極的に取り組めるような仕掛け作り
3. その他
- 評価の方法
 - オンラインに合わせる能力を高める事が出来ました

4.3 OER教材の有効性

今回使用したOERの動画教材および書籍教材が、参加者にとってわかりやすかったかについて、表4 (9) の「動画教材および書籍教材のわかりやすさ」という設問で「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4件法で尋ねた。図4は当該設問の回答結果である。いずれの教材に対しても100%の肯定的評価が得られた。



※回答者数20名

図4 動画教材および書籍教材のわかりやすさ

少なくとも本WSにおいては、OERと書籍が同等のわかりやすさであるという結果が明らかになった。また、表5の記述の中には「シラバス作成において、到達目標などの具体性など学生視点での見方を学んだ」「動機づけの促

しや実施のタイミングを学んだ」といった OER の講義内容に言及されたものも複数みられた。さらに「学生を 2 人ずつのペアにし意見交換後に全員に発表させるという手法は実際に試してみました」と授業で実践している記述もみられた。これらのことから、OER が授業に関する知識習得や実践に有効であったことがわかる。

OER が効果を発揮した理由としてはまず、今回活用した動画教材の内容が本 WS で取り扱う範囲と一致しており、本 WS との親和性が高かったことが挙げられる。動画教材が 1 本あたり 10 分程度の要点を絞った構成になっていたことも一因であろう。

また、理解度を確認する小テストがあり、小テストの難易度が適切なものであったことも、OER の効果を高めたのではないかと考えられる。動画を閲覧するだけでは、自身が正しく内容を理解できたかどうかを確認するのは難しい。小テストがあれば、少なくともその設問に対して理解できていたかどうかを確認し、理解できていなければ再度動画を見直すことができる。

小テスト作成にあたっては、その難易度に留意する必要もあった。事後アンケートでは、表 4 (10) のように「小テストの難易度」について「とても難しかった」「難しかった」「普通」「易しかった」「とても易しかった」の 5 件法で尋ねた。その結果、回答者の 75% (15 名) が「普通」、25% (5 名) が「難しかった」と回答していた。以上の結果から、今回作成した小テストは概ね適切な難易度であったと考えられる。

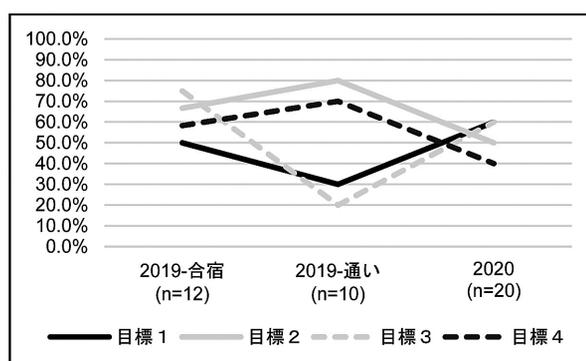
5. 今回 (2020 年) の WS の課題

事後アンケートの結果から、今回の WS の課題も明らかになった。以下では、Moodle に蓄積された参加者の学習に関するデータも踏まえながら、今後の WS 実施に向けた検討課題を示す。

5.1 学習目標に対する参加者の自己評価

4.2 で示したように、本 WS を通じて参加者は十分な学習成果を得ることができていた。しかし事後アンケートの結果から、本 WS の 4 つの目標達成に関する自己評価の結果が高いとはいえないことが明らかになった。

図 5 は、事後アンケートの「WS で設定した目標のうち、達成されたもの」という設問 (表 4 (7)) の結果である。図中のパーセンテージは、達成されたと回答した参加者の割合を示している。この設問は、WS の学習目標 (表 3 に示す 4 つの学習目標) それぞれについて、達成されたと思うものにチェックを入れる方式で参加者に回答を求めた。その結果、目標 1「学生の学習を促すシラバスを書くことができる」については、2019 年度に対面で実施した 2 回の WS よりも、達成されたと回答する割合が高かつ



※図中の目標 1～4 は、表 3 の目標 1～4 にそれぞれ対応している。また、図中のパーセンテージは、それぞれの目標について達成されたと回答した参加者の割合を示したものである。

図 5 目標達成の自己評価

た (60% : 12 名) が、目標 4「アクティブラーニングを取り入れた 90 分の授業の計画を作成できる」については、2019 年度実施の 2 回よりも、達成されたと回答する割合が低かった (40% : 8 名)。

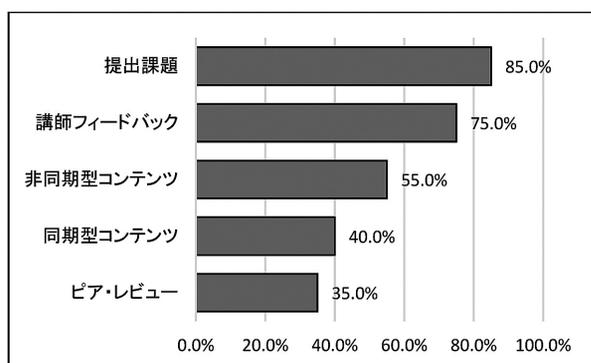
その要因の 1 つとして、最終課題に対する総括的評価が考えられる。今回の最終課題は、シラバスと 90 分の授業計画を、ピア・レビューや講師からのコメントを踏まえて修正したものを提出することであった。基本的には、コメントが反映されたシラバスや 90 分の授業計画が提出されていれば WS の修了としていたが、それだけでは目標を達成したという実感を持てなかった参加者がいたと考えられる。WS の修了をもって目標に到達していることの周知や、最終課題に対するフィードバックの充実については、今後検討すべき課題である。

また、表 4 (15) の WS の改善点など意見や感想に関する自由記述では「対面ではないのでテンポがつかみにくい」といった意見もあった。4.1 で示したとおり、参加者自身が学習計画を自由に立てられることは肯定的に捉えられることもある。しかし、業務などとの兼ね合いで学習計画を立てにくくなることもある。Moodle に蓄積されている参加者の学習履歴をみると、最初の課題となる「動画および書籍に関する小テスト」の受験を 7 月 18 日 (学習期間終了の 1 週間前) 以降に行っていた参加者が 3 名 (13%) いた。締め切りに追われると十分な学習が進められず、学習目標の達成を実感することが難しくなると考えられる。学習期間の途中に進捗を促す周知をしたり、課題の提出期限を複数段階に分けた設定を行ったりするなど、参加者の学習を働きかけるべきであろう。

5.2 学習意欲を喚起するコンテンツの運用

事後アンケートでは、「学習意欲を高めたコンテンツ」についても尋ねた (表 4 (11))。回答は複数選択可とした。その結果、最も学習意欲を高めたコンテンツは「提出課題 (シラバスの作成と授業計画)」であり、以下、「講師から

のフィードバック」「非同期型コンテンツ（動画教材と書籍教材）」「同期型コンテンツ（オリエンテーションやお悩み相談会）」「ピア・レビュー（Moodleのフォーラム機能を用いた提出課題に対するもの）」といった順であった（図6）。コンテンツのうち、同期型コンテンツやピア・レビューの学習意欲に与えた影響が比較的低い結果であった。これら2つのコンテンツの課題について、以下に考察する。



※回答者数20名

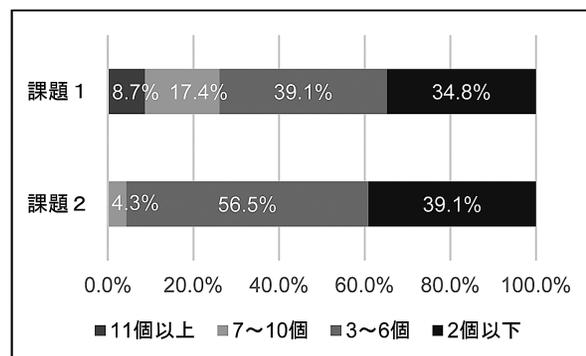
図6 学習意欲を高めたコンテンツ

まず、同期型コンテンツの課題について考察する。本WSの同期型コンテンツとは、オリエンテーションと「授業に関するお悩み相談会」の2つであった。前者は必ず参加するよう求めていた。一方で、後者は任意参加としており、平日の開催ということもあったため、当日の参加者は6名（全体の約26%）であった。学習期間が3週間と比較的長期にわたっており、十分な参加意欲を喚起できていなかった可能性もある。参加者の反応は、「Zoomで講師の先生方や同期の先生方と画面を通じてコミュニケーションできたことはとてもよかった」といったように肯定的なものであったため、今後は積極的に参加を呼びかける必要がある。その際、実施回数を複数回に増やしたり、授業や会議などのない休日に開催したりすることも、併せて検討すべきだろう。

次に、ピア・レビューの課題について考察する。図7は、Moodle上に投稿された他の参加者もしくは講師によるコメント数を示したグラフである。提出した課題に対して、他の参加者からコメントが投稿されれば、コメントを1個と数えている。そのコメントに対して課題の提出者が返信した場合も1個のコメントに数える。つまり、参加者間で相互のやりとりが1往復行われれば、コメント数は2個となる。

図7から、提出課題によってコメントの頻度が異なっていたことがわかる。7個以上のコメントが投稿されていたのは、シラバス作成に関する課題では26.1%であったのに対し、90分の授業計画では4.3%にとどまった。1往復（＝2個）以下のやりとりであった提出課題は全体の3分の1以上であった。今回は、他の参加者が提出した課題に対し

て、シラバスと90分の授業計画それぞれに1個以上のコメントを投稿することを参加者に求めていたが、求める投稿数を増やすなど、さらなる工夫の余地がある。



※課題1は「シラバス作成」、課題2は「90分の授業計画」を示す。

図7 各提出課題に対して投稿されたコメント数

6. まとめと今後の展望

本稿ではまず、本WSの再設計の内容について示した。対面実施の目的や内容を踏まえつつ、OERを取り入れて双方向性を担保した遠隔型FDとしてWSを再設計した。

再設計に基づきWSを実施した結果、満足度については対面実施以上となった。その理由は、いつでも意見交換ができることや、自分のペースで学習できるといった遠隔授業に対するメリットを参加者が感じていたことにあると考えられる。また、OERによる知識習得と課題による知識活用によって、学習成果を得ることができたことも理由として挙げられるだろう。OERの活用についても、一定の効果があったことが示された。ただし、目標達成に対する自己評価、同期型コンテンツやピア・レビューの実施などについては課題も残った。

今回は緊急的な措置で遠隔実施に向けた再設計を行ったが、今後は今回明らかになった課題を克服し、遠隔実施の学習効果を高める工夫について熟考する必要がある。また、遠隔実施によるメリットを活用することを前提としつつ、仲道ら（2021）が実施した対面実施とのブレンド型のWSも併せて検討すべきだろう。

注：

- 1) テニユア教員育成制度の詳細は、愛媛大学のホームページ (<http://ts.adm.ehime-u.ac.jp/>) で確認することができる。
- 2) WSに対する意見や感想は、8件の回答があった。その内容は以下に示す。
 - 様々な授業テクニックを学ぶことができました。今後は学生によりよい授業を提供できるように、積極的に自分の授業に取り入れていきたいと思えます。ありがとうございます。
 - 自分の授業の組み立てを客観的に見るよい機会をいただき、感謝いたしております。

- オンラインでいつでも意見を交換できる点は非常に良かったのですが、通常業務を行いながらなのでどうしても時間外に読んだり書き込んだりしなければ学習計画に間に合わない… (中略) …オンラインで文字に残るのは良いと思う反面、やはり対面ではないのでテンポがつかみにくい
- オンラインでありながら、様々な分野の先生方と交流ができ、多くの学びがありました
- Zoom で講師の先生方や同期の先生方と画面を通じてコミュニケーションできたことはとてもよかった
- 対面での実施が叶わなかったのが残念でしたが、実際に今回の方法でやってみると、自分のペースで作業が進められたり、先生方のコメントに対してベストな答えをお示しするために考える時間が十分にいただけたりと、長所もたくさんありました… (中略) …動画による学習も何度も確認できたので、今後もぜひ、取り入れていただきたいなと思いました
- オンライン上で各教員の先生方のシラバス・講義計画ともに多様な形態や意見を参照することができ、また、他の方々同士の意見のやりとりも Moodle 上で可視化されていたため、(対面ではなかなか難しい) 全てのやりとりを閲覧することができた点は、オンラインならではのメリットだと思います
- 書籍教材なら英語のオプションも欲しい

参考文献：

- 今野文子, 朱嘉琪, 三石大 (2017) 「大学教職員向けセミナー 動画配信サイト PDPonline の閲覧ログに基づく利用状況の確認」, 『教育システム情報学会誌』, 34 (2) : 184-189
- Hodges, C., Moore, S., Lockee, B., Trust, T., & Bond, A. (2020). "The difference between emergency remote teaching and online learning" *EDUCAUSE Review*, <https://er.educause.edu/articles/2020/3/the-difference-between-emergency-remote-teachingand-online-learning> (参照日: 2020年10月8日)
- 中島英博編 (2018) 『シリーズ大学の教授法4 学習評価』, 玉川大学出版部
- 仲道雅輝, 村田晋也, 小林直人 (2021) 「愛媛大学におけるティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップのプレンディング開催の実践－対面とオンラインでのメンタリング設計の取り組み－」, 『大学教育実践ジャーナル』, 19 : 173-180
- 仲道雅輝, 小林直人 (2020) 愛媛大学における新任教員の研修制度. *IDE 現代の高等教育*, 619 : 40-44
- 重田勝介 (2016) オープンエデュケーションー開かれた教育が変える高等教育と生涯学習, *情報管理*, 59 (1) : 3-10

※本研究は、JSPS 科学研究費補助金 (課題番号 20K14085) の助成を受けた。